PMR 資格試験への挑戦　1

実際に経験したプログラムマネジメントと P2M

中電シーティーアイ 総括ユニット 品質保証部 PgMO グループリーダー
赤塚　正芳

■　受験動機

電力会社である親会社が法的分離により、大小 150 程度のシステムが同時期に再開発・改修が行われることとなりました。問題無くカットオーバーさせることを目的とした組織が自社内で立ち上がり、そのプログラムマネージャーとして私が任命されました。
それまでの PM 経験、PMO 経験よりも広い視点でマネジメントしていくこととなり、プログラムマネジメントの基礎から実践に適した考え方として P2M が妥当だと思い、自然な流れで P2M の資格取得を意識するようになりました。

■　受験の感想

受験を通じて感じたことの 1 つ目として、プログラムマネジメントの仕事そのものが P2M の考え方に当てはまることが、試験を通じて実感することができたことです。本来、企業のミドルマネージャーがするべき仕事の骨格が P2M で語られており、試験を通じて体で理解することができたと感じています。

2 つ目は、面談試験、モジュール試験等を通じ、「何に基づいて行動しているのかの目的の明確化」「問題の本質は何かを全体最適視点で捉える考え方」「経営層が分かるように説明・提案できているかという経営レポート・説明の在り方」といったものを、様々な角度から見られる試験だったという点です。モジュール試験は筆記とグループワークが交互に進行し、非常に忙しくそして頭をフル回転する試験のため、普段通りの振る舞いで臨むように心がけました。その結果、面談で指摘を受けた点は、私の強みと弱みは、核心を突くものであったため、普段の仕事に活かすことができる有難いものでした。

3 つ目は、プログラムマネージャーとして普段から行っていること、行わなければならないこと、求められていることと、PMR に求められるものは、ほぼ同値だったという点です。モジュール試験でのグループワークやプレゼンテーション、2 度の面談を通じて、実業務として進めているプログラムマネジメントと照らしてみると、多くの部分が自然に紐づけられるということを体験することができた試験でした。全体最適視点での経営レポートやシンプルで明解なエスカレーション等、実業務の質向上と PMR としての質向上の両方に相乗効果が生まれたように感じました。

■　PMR としての展望

今回の親会社の法的分離対応を題材にした、プログラムマネジメントに関する論文、発表会を展開していこうと思います。PMR の立場として、プログラムマネジメントの実践例を示し、プログラムマネジメントの認知度向上および創出価値の重要性を広めたいと思います。
また、今後 2 年間で自社の QMS の再構築により品質保証業務を強化するプロジェクトが立ち上がっており、私が推進リーダーを担っています。この取組みについても、プログラムマネジメント事例として展開していこうと思います。

【プロフィール】　赤塚　正芳（あかつか　まさよし）
システムの開発・保守業務を経験後、10 年間、大小 10 程度の PM を担当。その後、自社フレームワーク構築の PM や親会社の標準化推進リーダーを担当の後、PMO 業務に従事。2018 年 10 月より、親会社の法的分離対応のプログラムマネージャーとして、大小 150 あまりのプロジェクトが 2020 年 4 月運用開始に向けたプログラムマネジメントを遂行。現在は、QMS の一新に向けた品質保証改革プロジェクトのリーダーを推進。